校長室だより

令和６年３月　１日
№３３

屋外に出ようとしてマスクを外したところ家族に止められました。「花粉が飛んでるでしょ！」そう言えば、ここ数年コロナでずっとマスクをしていたからこの時期の花粉対策の意識がなくなっていました。これもコロナ禍からの復活でしょうか。

自立。学校ではよく使われる言葉です。特に特別支援学校では頻度が高いと思います。社会自立、身辺自立、教科・領域としての「自立活動」（昔は「養護・訓練」という名前でした）など、自立に向かっていきましょうということがよく言われると思います。一人でできること、一人で考えられること、一人で判断できること、とても大切なことです。這えば立て、立てば歩めの親心…ここができれば次へ、そしてまた次へと目標を上げていくことは教育のありかたとしても当然のことで、否定するものではありません。でも、ちょっと待って。自立を目指して次へ次へ…これは大事なことなんですが、時に大切なものを見失っているようなことはないでしょうか？そんなことを考えていた時、新聞にある記事を見つけました。ある障害児のお母さんの手記で、一部を抜粋します。

> 車いすに乗る娘をみると、周りの人は「大変そうだね」と言う。でも、娘は楽に移動できて、にこにこと楽しそうだ。自立することは大事だとは思う。でも、娘は家族が大好きなようだ。お母さんやお父さんが帰宅すると拍手し、ひざをたたいて喜びを表現する。自立とは、何もかも一人でできることではなく、できないことも周りが手助けしつつ、本人が自分の人生を楽しむことも自立なのでは。娘は娘の世界で生きている。何が普通で、何が普通でないのか。…

基準（普通）を一般社会においてしまうと、そこに到達しないのは×で、そこを目指していかなければならないと考えてしまいます。自立目標があってそれを目指して学習する。それが学校。でも、Ａさんの世界、Ｂさんの世界、いろいろな世界があってもいいはず。近年は、多様な人々の生き方を認める社会になってきています。特に、多様な子どもたちが通うほんごうではそこを意識した教育をもつべきなのではないのだろうか…。これはまだ、学校全体で認められた方針ではありませんし、校長の私見にすぎません。でも、４０年間、子どもたちに接してきた自分の経験からはどうしてもこういう考えにたどり着いてしまいます。繰り返しますが、教育効果や目標への努力を否定するものではありません。ただ、子どもの幸せの形って様々あるんじゃないかな～なんて…。

「依存をなくすことが自立の達成であるというのは間違っている。人間は誰かに依存せずに生きて行けるものではない。自立とは必要な依存を受け入れ、それを自覚し、感謝することだ。」心理学者の河合隼雄先生の言葉を、数年前、前任校の卒業式でお借りしました。甘えていい、そして、誰かが必要としているときにその人を支えてください、そんな社会人になってほしい…そんなことを伝えたのを思い出しました。
来週のきょうは高等部の卒業式です。

ハートフルメッセージ
「校長先生ありがとう」は…ない…